大好きな人

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
大好きな人

【Ｎコード】
Ｎ３２５８Ｊ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
２０枚です。一応、今年はこれくらいの尺のを量産したい。

1

大好きな人が死んだ。
オレは冷たい部屋の片隅で為すすべもなく、しくしく泣いている。
「なんでだよぅ。なんでだよぅ」
嘆いてもどうにもならないのはわかっている。それでも嘆いてしまうから人間というのは実に厄介だ。
もっとドライになれんもんかね？コンピューターみたいに。
なれるわけがない。人間はコンピューターほど賢くないし、コンピューターほどバカじゃない。
迷い苦しみ、ひねって転んで転がって、ぐるぐる回って。
そういうもんだ元々。だけど、今日は何をする気にもならない。
オレは大の字になり不貞寝（ふてね）した。今日は仕事ズル休みしてやろう。
「ん」
何かの音が大きくなる。
窓の外を見ると一台のヘリコプターがこっちに向かってくる。
「うわっ」
ずがあああああああああああああん。
「うきゃあああああああああ」

しばらくお待ちください。

「こちら報道局です。緊急ニュースが入りました。愛する人を失って途方に暮れていたたけし氏のアパートにヘリコプターが急に突っ込みました。繰り返し報道します。愛する人を失って」

「へへっ久しぶり。たけちゃん」
「げ。ロリ華」
ヘリコプターから降りたその少女は紛れもなく、ロリ華その人だ

った。
「いったいぜんたい」
「へへへ。あたし、ヘリの免許とったんだ。びっくりした？」
「びっくりしたというか」
オレは、部屋を占拠するヘリコプターを眺め、ため息が出た。買ったばかりの五十万円のエレキギターが完全に潰れてる。
もちろん、大好きなあの子の遺影も粉々だ。
「お前なぁ。無神経なとこは全然変わってないね」
「てへっ不況の世の中、たけちゃんみたいに繊細だと生きてけないよ」
「もうっそれが無神経ちゅうんだよ」
オレはむかついて、ヘリのボディにパンチした。
「硬ェ！！」
オレはあまりの痛さに、ぴょんぴょん飛んだ。
ロリ華は、ははは と笑った後、お腹すいたなとぬかしやがる。ほれ、完全に無神経。部屋をめちゃくちゃにしておいて、よく言うよ。おー痛え。
「たけちゃんのスパゲッティ食べたいなぁ」
ロリ華が上目使いでウインクする。
オレはこれに昔から弱かったのだ。
「わかったよ。作るよ」
「やったぁ」

ＣＭ
ついに出ました、もじゃもじゃ饅頭！業界初です。饅頭に毛が生えています！非常に食べにくい。今なら大特価１０５円！！！

オレとロリ華はベッドの上で寝ていた。要するにまぁ何だ。やっちまったわけだね。うはははは。
ヘリコプターはうまいこと部屋から出し、駐車場に停めた。部屋

の掃除はまた今度しよう。
オレは煙草に火をつけた。
「ふィ～。しかし、ロリ華のやつ、何で急にオレんとこに来たんだろう」
たけしの隣で、ロリ華はぐーぐー寝ている。
「ま、いっかぁ」

それから、すぐにわかった。ロリ華は家出したのだ。ロリ華のお父さんから電話があった。むちゃくちゃ怒っていた。
「たけしくん！今すぐロリ華を連れてきなさい！」
「はぁ」
ロリ華の方を見ると、首を横に振っている。
めんどくせえなぁ。
ロリ華を正座させた。
「なんで家出したのよ」
「だって、お父さん、あたしを勝手に結婚させようとするんだもの」
あ。そういうことね。よくある話だ。
だからって、ヘリコプターで突っ込まれたオレの立場はどこにもない。
「しょうがないよ。お前の父さん、大会社の社長だもの」
「好きじゃない人と結婚するなんていや！」
やれやれ。ガキだなぁ。こいつは。
「もうわかったよ。足くずしてよし」
「てへへへ。足しびれた～」
無邪気に笑うロリ華。この笑顔に昔から弱いんだよなぁ。怒る気が失せる。
まぁとはいえ、大人としては、これでよしとはならない。何とか説得して、こいつを結婚させねばならぬ。あれほど、お父さんが怒ってるということはよほど大事な結婚なのだろう。会社の存続に関わるものかもしれぬ。大量の会社員を路頭に迷わすわけにはいかぬ。

ロリ華には悪いが犠牲になってもらう。
「たけちゃーん。腹へったー」
とはいえ、こいつはけっこう強情だから、無理矢理、家に戻すことは不可能だ。というより、戻したら、こいつ、また、オレんとこにヘリコプターで突っ込むかもしれぬ。それは絶対いや！
「うーむ。難しいなー」
「たけちゃーん。ハンバーグ作ってよー」
うるさいなぁ。誰のために悩んでると思ってやがるんだ。
ハンバーグを作りながら考える。
というより、相手の男はどんなヤツなんだ。
それにもよる。
例えば、イケ面で優しくてファッションセンスがよくて。
とかそういう男性ならまぁよし。
政略結婚だから金持ちには違いないだろう。
しかし、顔がドラえもんで、すぐに暴力を振るい、やたらに道路にタンを吐く男だったら・・・。
それはロリ華がかわいそうだ。
オレは男に会いに行くことにした。
とはいえ、ロリ華が教えてくれるわけない。どうしたものか。

ある夜、寝ている時に、隣でロリ華がうーんうーんとうなっていた。
これは間違いない！　結婚相手が夢に現れたのだ！
オレはチャンスだと思った。今、ロリ華の夢の中に入れば、男に会うことができる。
オレは気を集中させた。
「ロリ華、ロリ華、ロリ華」
呪文のように唱える。
「ええい！」
その瞬間、オレはものすごい勢いで体ごと、ロリ華の頭の中に吸

い込まれていった。
「わあああああ。新感覚うううう」
ストンと着地した。
「ほう。これがロリ華の夢の中か」
あたりをきょろきょろ見渡す。ちょうど目の前に、焼きそばの屋台があった。
お腹がぐゥと鳴った。毎晩、ロリ華がオレの分まで食べちゃうので腹ペコなのだ。
オレは屋台に駆け寄った。
「おっちゃん。一個ちょうだい」
「あいよ！できたて今あげるからね。旨いぜえ？」
「やったぁ」
オレはわくわくしながら、おっちゃんが焼きそばを焼く作業を眺める。いい匂い。すでに目的を見失ってるオレ。何しにきたんだっけ？オレ。
まぁいい。焼きそばがこんなにおいしそうなんだもの。きっと大した用事じゃない。
「あいよ兄さん。お待ち」
「わぁ。すげえ」
オレは目を輝かせる。こんな焼きそば見たことねえ。煙がもくもく。食欲を誘う。うーん。いい匂い。
まず肉の量が普通の倍だ。
「おっちゃん。これ、何の肉？」
「へへっ気づいちまったか。そりゃ松阪牛さ」
ええええええええええ。
マジかよ！
オレはがたがた足が震えた。
まさか、ここで松阪牛が登場するとは。
「おっちゃん、ウソついてんじゃないだろうね」
「わしの目を見ろ。ウソをつく男の目か？」

なんかウソっぽい。
一口、肉を食ってみた。
「うめえええええ。マジ松阪牛だあああああ」
「ほれ見ろ」
おっちゃんは腕を組んで、へへーんと得意げである。
「おっちゃん。こんなんして採算とれるのかよ」
「へっへ。今は不況だ。安くて旨いものを。それがうちのモットーだ」
「へえ」
ばくばく食う。
「といってもね。うち、実は松阪牛を飼ってるから安いのは当たり前なの。見にくる？」
「ほんと？」
オレはよだれが出てきた。
焼きそばをあっという間に平らげ、オレはおっちゃんの後についていった。
屋台から少し離れたところに、小さな牛小屋があった。
「あっ山本さん！」
「おい！吉田、隠せ！」
「あわわわわわ」
うわぁ。すげえ。牛がしゃべってる。
牛たちは急いで、おっちゃんの前に整列した。牛臭い。
「ん。お前ら。今、何を隠した」
「いや別に。えへへへ」
「怪しい。この野郎！」
おっちゃんは、一匹の松阪牛に詰め寄った。
すると、牛は、緊張して手からするりと、牌（パイ）を落とした。
「またお前らマージャンやってたのか」
「す、すいやせん」
松阪牛たちはぺこぺことおっちゃんに頭を下げた。

「兄さん。かっこ悪いとこを見せちまったねえ。こいつらわしがいねえと、すぐに仕事をさぼって遊びやがる」
松阪牛の仕事って何よ？？？？
「おい。お前ら、ランニングに出かけるぞ」
「えええ」
「やだぁ」
「うるさい！さっさとジャージに着替えろ！」
松阪牛たちはしぶしぶ、わらの下からジャージを取り出して着た。みんな体がでかいからはちきれそうだ。
「何でランニングするの？」
「はっは。いい肉になるにはね。寝てるだけじゃダメだ。肉が硬くなっちまうからね。運動せにゃあ」
おっちゃんは自転車にまたがった。
「ようし。お前ら。行くぞ」
「ふえええい」
気のない返事である。松阪牛たちはおっちゃんの後を追った。
その後をオレはおっちゃんに借りた原付で追いかけた。
「ピッピッ」
「まっつざか」
「ピッピッ」
「ぎゅう。ぎゅう」
おっちゃんの笛に合わせ、牛たちは掛け声をかけながら走る。尻尾でぺしんぺしんと自分の尻を叩いたりしてる。
汗が流れ、実に牛臭い。
いやぁ。しかし、学生時代を思い出すなぁ。あの頃はオレも四番のエースで、マネージャーはロリ華。
む。
ロリ華？？？
何か心に引っかかる。
ロリ華？？？？？？

「ピッピッ」
「うまくて」
「ピッピッ」
「やすい」
オレは原付にまたがりながら、うーむと悩む。ロリ華。はて。オレはロリ華に何か用事があったのではないか。だって、こんなに気になるんだもの。何か用事があるに違いない。
でも、全然思い出せない！
オレは、腕を組んで、原付の上でうーんとうなっていたら、電柱に激突した。

しばらくお待ちください。

2

オレは目が覚めたら、部屋にいた。ちょっと不気味な部屋だ。壁も床もみな黒色でドクロのポスターやプロレスラーのポスターが貼ってある。よくわからんが、ヌンチャクや鉄アレイが床に転がってる。そんな部屋の黒い布団の中にオレはいた。窓の外が実にのどかな田園風景でギャップも甚だしい。

「うーん。誰かに助けられたのだな」

黒いドアが開いた。

「あっロリ華」

ロリ華が、黒いお盆に黒いコーヒーカップを乗せて持っている。

なぜか、黒い服を着てる。

「誰だ。ロリ華ちゅうのは」

え。ロリ華じゃないの？？？？

「いや。ロリ華だろお前。知らんふりすんなよ」

「しつこいやつめ」

ロリ華が、あっつあつのコーヒーをオレの顔にぶっかけた。

「あじいいいいいいいい」

オレはベッドの上を転がりまわった。

「ぎゃはははは。おもろい。おもろい」

ロリ華が手を叩いて喜んでいる。こいつ、こんなキャラだったっけ？？？

「なんでこんなことするんだよぅ」

「やかましいわボケ。助けてやったのに生意気な」

こんなしゃべり方じゃないはずなのに。完全にキャラが変わってる。

「ロリ華じゃないつうなら、誰だよお前」

「それはこっちのセリフじゃい。お前こそ誰じゃい」

「オレはたけしだよ」

「オレは、ロリ夫だ」
はぁ。なんじゃそれ。疲れる。
「わかったわかった。ロリ夫でいいよ」
ロリ華じゃなかったロリ夫はバカにされたと思って、黒い竹刀でオレをぶった。
「いてええええええ」
「生意気なことをぬかすなガキめ」

3

また黒いドアが開いた。
オレは腰を抜かせた。
オレが目の前にいる。
「え。オレ？えええええええ」
「ロリ夫くん。だぁれ。この人」
「たけしというらしいぜ」
なぜか、目の前にいたオレそっくりの男はおねえ言葉だ。しかも、服がピンク色でピンクのスカート。髪にはピンクのリボンまでしてる。実に気色が悪い。
「あのそのあの」
オレは何と言ったらいいかわからない。
「き、君。誰？？？」
「あたし？あたし、たけみ」
うううう。名前までおねえだし、オレと被ってる。
「あの。ロリ夫さん（叩かれるのが怖いのですでにさん付けしてる）」
「なんじゃ」
「このお方とはどういう関係で？」
「ああ。たけみか。こいつはオレの彼氏や」
お似合いのカップルだよ！！！
でも、オレにそっくりなのですげえ複雑な気分。

4

またまた黒いドアが開いた。出入りの多い部屋だな。
「あっ」
「親父っ」
あ。ロリ華のお父さんやん。
「ロリ華っ」
「な、なんだよオレはロリ夫だぜ」
「ふざけんな！ロリ華！」
なんだ。やっぱりロリ華やん。
「行くぞ！来い！」
ロリ華のお父さんがロリ華ロリ夫どっちや。まぁそいつの腕をつかみ連れていこうとする。
「いやだ！絶対いやだ！」
「どういうこと？」
オレはオレにそっくりなたけみに尋ねた。
「ロリ夫くん、結婚させられるかもしれないの」
「ふうん」
たけみはロリ華と結婚してるわけちゃうねや。
「どんな相手なの」
「それが・・・」

5

たけみはオレに耳打ちした。
「ええっ。ダークラビット???」
「そうなのよ」
「誰それ」
たけみはズコーーーーーッとこけた。
「し、知らないのに驚いたの???」
「てへへ。申し訳ない。話の流れがそんな感じだったので。ダークラビットの説明してよ」
そんなこと言ってるうちに、ロリ華ロリ夫どっちや。もういい。ロリは、お父さんに耳を引っ張られて、外に出て駐車場に停めてあったヘリコプターに乗り込もうとしていた。
「やばいぞ。たけみ。飛んでいっちゃう」
「困ったわね。たけちゃん。飛びついて」
「お、おう」
オレとたけみは、すでに飛びかかっているヘリコプターの足に捕まった。
そのまま、ヘリコプターは上昇。
「うわああ。怖えええ」
「落ちたら絶対死ぬわよう」

6

眼下に広がる家々はすでに米粒である。強い風。体がちぎれそう。
その時、たけみの手がヘリの足から離れた。
「た、たけみいいいいい」
「いやあああああああああ」
しばらくして、民家の屋根を突き破る音が静かに聞こえる。おそらく、この高さなら即死であろう。
オレは複雑でならない。なにしろ、たけみはおねえみたいなとこはあるが顔がオレにそっくりなのだ。オレが死んだような気にもなった。
というより、オレももう限界だ。腕がちぎれる。手を離せばラクになる。しかし、それは死を意味する。
オレは歯をくいしばり、冷や汗を流し、ヘリが下降するのをじっと待った。しかし、一向に下降する気配がない。
「もう駄目だ。限界だ。もう無理なんだ」
とその時である。
上の方で声がした。
？？？？？？
「待ってくださいよ！」
「もう待てない！印刷所の人だって徹夜で待ってんねん！」
おお。この声は。作者と編集者。
あっとオレは思った。これは原稿の中だ。となれば、原稿の外に作者がいるのは当たり前の話ではないか。
オレは大声でわめいた。
「助けてえええええええええええ」
「？　何だ。大崎さん。何か聞こえましたか」
「おい。原稿用紙から声がするぞ。行ってみよう」
オレはしつこく叫び続けた。

「ここだあああ。ここだよおおおお。助けてえええええええ」
作者と編集者は原稿の中を覗いて驚く。
「おい。主人公、大ピンチやないか」
「これはまずい。主人公がヘリから落ちてしまえば話が終わってしまう。何とかしないと」
「うぬうう。油断してた。口論してるすきにキャラが勝手に動き始めたのだ」
青い空を突き破り、大きな腕が四本飛び出す。
「おい。捕まれ。早く」
「落ちるぞ」
オレは一生懸命、大きな腕に腕を伸ばした。
その瞬間、あっけなく、本当にあっけなく、するりと落下。
「うわあああああああああああ」

7

落下。う
落下。わ
落下。あ
落下。あ
落下。あ
落下。あ
落下。あ
落下。！
屋根を突き破る。
湯船に着水。
背中を洗いながら、びっくりしてるじいさん。指さしてる素っ裸のちびっこ。
つまり、ここは銭湯！
「つめてぇ！」
オレは水風呂から飛び出す。
あーあ。服びしょびしょや。へーっくしょん。
男の子がちっこいち（ピー！）ん（ピー！）ち（ピー！）んを揺らせながら、オレに言った。
「たけしさんだぁ。ホンモノのたけしさんだぁ」
え。オレのこと知ってるのか。
「オレのこと知ってるの？」
「ぼく、週刊ノベルで「大好きな人」読みましたよ。最後、ロリ華ちゃん、ダークラビットと結婚してしまってかわいそうでしたね」
な、なにいいいいいいいい。
ま、ま、まさか、オレがもたもたしてるすきに小説が終わってしまったというのか。
こいつはまずい。

「坊や。ダークラビットとロリ華はどこにいるんだい？」
「え。たけしさん知らないの。あ。そうか。たけしさん、ダークラビットに殺されたものね」
なにいいいいいいい。そういう展開いいいいいいい？？？？
「あれ。でも、今いるたけしさんは一体。あ。そうか。小説の話だから本当に死んだわけじゃないのかな。確かに映画で登場人物が死んでも俳優が実際に死ぬわけじゃないものな」
「そんなことはどうでもいい！坊主！質問に答えろ！」
「う、うん。魔法の城に二人で住んでるよ」
「へーっくしょん」
「たけしさん。着替えていった方がいいよ」
「お、おう」

8

その頃、ロリ華は、魔法の城の最上階にあるベッドルーム。ピンクいベッドの上で、ダークラビットに迫られていた。
「ぐっふっふ。いいだろ。いいだろ」
「いや！近寄らないで！変態！」
ダークラビットは、気の強いおなごじゃなぁそんなこともまたええなぁと思い、ニヤニヤしていた。
ロリ華は家に帰りたくて帰りたくてたまらない。大好きなお笑い番組がやる時間だ。
「ぐっふっふ。太もも。太もも」
ロリ華はムカついてきて、ポケットにしまっておいた痴漢撃退用のビリビリするやつを取り出し、ダークラビットに当てた。
びりびりびりびり。
「むぎゃ。むぎゃ。むぎゃあああああああああ」
ダークラビットは衝撃のあまり、ベッドの下へ転げ落ち、失神した。

ここは、ダークラビットの夢の中。
「うーん。どこだここは。あ。そうか。ロリ華ちゃんにビリビリやられて、それで」
見渡すと、野原の真ん中。そこには若い男がいる。
男が叫んだ。
「ロリ華を返せ！」
え。こいつ、ロリ華ちゃんと関係あるヤツか？
「そんなこと言ったって、わし、何が何やら」

「しらばっくれる気か。こいつ」
オレは叫んだ。いつの間にか、どういう経緯かようわからんが目

の前にダークラビットがいる。なぜか、野原の真ん中。いや、まだ名前を聞いとらんのでわからんけど、見た目がうさぎなので間違いない。
それにしても、メタボリックなうさぎだなぁ。長い耳以外、ブタだぞ。
オレはポケットにしまっておいたビリビリするヤツを取り出した。
お。ダークラビットのやつ、ビビってる。ふん。大したことねえな。くそブタめ。
オレはダークラビットにビリビリするヤツを向けた。
びりびりびりびり。
「うぎゃあああああああああ」
ダークラビットは倒れた。

またまたダークラビットの夢の中。
「うーん。頭くらくらする」
なんだかあたりが暗い。夜なのか。
前を見る。よーっく目を凝らして見ると、さっきの男。
「またか！」

「何やこいつ。不死身か」
オレはもうたじたじだ。また、シチュエーションが変わってる。もう野原じゃない。でも暗くてどこかようわからへん。しかも、ビリビリが全然効いてない。くそう。どうしたらええんや。
そうこうしてるうちに、ダークラビットがオレに向かってものすごいスピードで直進し、体当たり。
オレは崖から落ちた。ええっ。そんなとこで戦ってたのか。
「うわあああああああああ」
海に着水するかと思ったら、トランポリンに着地。
跳ね上がった。
「うわあああああああああああ」

また、目の前にダークラビット。
また、落下。「うわあああああ」
崖の上とトランポリンを行ったり来たり。
しまいには、ダークラビットが退屈になってきてケータイをいじり始めた。
「ぐふふふ。ロリ華ちゃん。かわいいなぁ」
待受けをロリ華にしてけつかる。
ダークラビットの後ろで、編集の大崎さんが腕時計を見ながら大声で叫ぶ。
「あと、二枚ですよ。落とせるんですか！」
ダークラビットは、わしに聞かれても知らんがなとケータイを見ながらため息をつく。「ロリ華ちゃんのブルマ姿、萌える」
一方で、オレは相変わらず、上へ行ったり下へ行ったりの繰り返し。
「き、き、気持ちわるうううううううい」
まったくもう！　作者は何しとんだ！
あとで読者に聞いた話だと、作者は気分転換にパチンコに行っていたのだそうだ。仕事をさぼって。
神も仏もないのか！！
とその時。
ずがあああああああああああああん。
暗闇を突き破って、ヘリコプターが突っ込んだ。ま、まさか。。。
「ロリ華！」
「うわあああああああああ」
「あーれー」
大崎さんとダークラビットは抱き合いながら、崖から落ちた。
「ほれ。たけちゃん」
ロリ華が手を伸ばす。トランポリンから飛び上がったオレは手を伸ばし、ロリ華の手をしっかり握った。
そして、ヘリの中に持ち上げられた。

「え。ロリ華。どこから来たの」
「そんなことどうでもいいでしょ。ほれ。たけちゃん。あたしにしっかり捕まって」
「う、うん。あ。おっぱい触っちゃった」
「いやん！」
ロリ華はヘリを加速させた。
「わあああ。どこ行くのおおおお」
「あ。光が見えてきた」
ずがあああああああああん。
PC（あるいはケータイ）の画面を突き破る音。

おしまい

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3258j/

大好きな人

2010年10月8日11時17分発行